西洋文明の再生による西側覇権の維持を

マルコ・ルビオ米国務長官

2026 年 10 月 4 日　アテネ

米国のマルコ・ルビオ国務長官（兼安保担当大統領補佐官）は 10 月 4 日、ギリシャのアテネで演説した。長官はこのなかで、ギリシャに始まる西洋文明を人類進歩の中心として描き、その再生と軍事力による西側覇権の維持をうったえた。披瀝されたのは植民地主義の歴史や非西洋文明の貢献をまったく無視した西洋中心主義的な哲学と歴史観であり、ここにはグローバルサウスの台頭に危機感を燃やすアメリカ帝国主義者のメンタリティーと焦燥感が如実にあらわれている。以下はその全文である（見出し、小見出しは編集部）

Secretary of State Marco Rubio Remarks - United States Department of State



ギリシャ文明はいまなお西洋文明の源泉

世界には数多くの遺跡があります。その多くは、すでに歴史の役割を終えた場所です。遠い昔に栄えた文明の名残であり、人々の記憶からも消えつつある過去の遺物です。

しかし、アクロポリスは違います。

私の背後にあるこの建造物を生み出した文明は、何千年もの間、西洋世界の人々を魅了し続けてきました。政治家や芸術家、哲学者たちは世代を超えてこの地に思いをはせ、驚きと深い敬意を抱いてきたのです。

時の流れは、人々の感覚を鈍らせるものです。かつての偉大な勝利も、悲惨な敗北も、やがては歴史教科書の片隅に載る小さな出来事となり、子供たちが暗記してすぐ忘れてしまうような知識になってしまいます。

ところが、古代ギリシャ人は違います。彼らはまるで不思議な力で私たちの記憶をつかみ続けています。私たちは何度も何度も彼らのもとへ立ち返り、その思想や業績を振り返らずにはいられないのです。

アメリカはその文明の正当の継承者

紀元前 480 年、ペルシャ帝国の王クセルクセス率いる大軍がアテネに押し寄せ、この町の神殿や聖域を焼き払いました。

その頃までに、多くのアテネ市民は船で近くの島へ避難していました。しかし、一部の人々は故郷を捨てることを拒みました。彼らはアクロポリスの岩山の要塞に立てこもり、最後まで抵抗することを選んだのです。

彼らは崖の上から巨大な岩を落としてペルシャ軍を迎え撃ち、当時世界最強だった大帝国の軍勢を何日間も足止めしました。しかし最後には力尽き、ペルシャ軍に制圧されます。神殿は略奪され、聖域は焼かれ、アクロポリスは徹底的に破壊されました。

それでもアテネ人は諦めませんでした。戦いが終わって故郷に戻ると、壊された神殿の残骸を集めて丘に埋め、その記憶を後世に残しました。そして数十年後、政治家ペリクレスの時代に、かつての廃墟の上にパルテノン神殿を建設したのです。

それから 2500 年にわたり、パルテノン神殿は立ち続けてきました。その間に多くの帝国が興亡を繰り返しましたが、この神殿を築いた人々の子孫、すなわちアテネとローマから受け継がれた文明は世界中へ広がっていきました。

そして今、アメリカ建国から約 250 年後、私はその共和国の国務長官としてここに立っています。私はスペインから新大陸へ渡った移民のひ孫でもあります。私がここに立つのは、どれほど長い年月が過ぎようと、どれほど遠く離れていようと、私たちが古代ギリシャに負っている恩義は決して消えることがないと伝えるためです。

アメリカの歴史には、古代ギリシャの影響が至るところに刻み込まれています。ワシントンの政府庁舎や記念碑に並ぶ壮大な円柱やドームは、その典型です。さらに、米国憲法が生まれた都市フィラデルフィアの名前も、もともとはギリシャ語に由来しています。

本質は民主主義そのものでなく、挑戦と競争、向上の精神

私の国アメリカを建国した人々は、ギリシャから受け継いだ文化や遺産に深く魅了されていました。彼らは歴史について非常によく学んでおり、自分たちが歴史の中でどのような位置にいるのかを強く意識していました。しかし、数ある過去の時代の中でも、古代ギリシャとローマほど彼らの関心と想像力をかき立てたものはありませんでした。

多くの人は驚きますが、アメリカ憲法制定を擁護した『フェデラリスト・ペーパーズ』で最も多く引用された著者は、啓蒙思想家でも政治理論家でもありませんでした。それは、ギリシャとローマの偉人伝を書いたギリシャ人歴史家プルタルコスだったのです。

古代ギリシャがアメリカ建国の理念に与えた影響については、これまでも数多く語られてきました。私たちはよく、アテネが民主主義を生み出し、プラトンやアリストテレスが西洋哲学の基礎を築いたことを知っています。また、法、徳、市民としての責任、共和政といった考え方もギリシャの都市国家に源流があります。

「民主主義」「専制政治」「政治（ポリティクス）」といった政治用語でさえ、その起源はこの地にあります。

もちろん、それらはすべて事実です。しかし私たちアメリカ人、そして西洋人全体がギリシャに負っているものは、それよりはるかに深いものです。

民主主義や哲学といった制度や思想は、古代ギリシャ人が持っていたもっと根本的な資質の表れにすぎません。重要なのは制度そのものではなく、その制度を生み出した精神なのです。

アテネで初めて十分な形で現れたのは、その後の西洋文明を特徴づける数々の価値観でした。

それは、

- 強い個人意識
- 飽くなき向上心
- 大胆な探検精神
- 発明と創造への情熱
- 新しい発見への憧れ
- 冒険や挑戦を恐れない心
- 栄光を求める意志

です。

さらに彼らは、世界がどのように動いているのかを知りたいという尽きることのない好奇心を持っていました。自然の謎を解き明かし、宇宙の秘密を理解しようとしたのです。

そして何よりも彼らは、「不可能」という考え方に我慢できない人々でした。あらゆる限界や境界に挑戦し、未知の世界の奥深くまで見通そうとしていました。

西洋文明の強みは秩序の理解と理想の追求の能力

こうした考え方は、単にある哲学者が唱えた理論や教えではありませんでした。それは古代ギリシャ人という民族そのものの気質でした。彼らの伝統や物語、想像力の中に息づき、市民に求められる資質となり、さらには彼らが生き、戦い、ときには命を捧げる価値観でもあったのです。

だから古代ギリシャを理解することは、私たち自身を理解することでもあります。

この地で花開いたのは、人類がこれまで無知や暗闇、距離によって知ることのできなかったものを明らかにしようとする西洋の精神でした。ギリシャ人は歴史を作っただけではありません。彼らは「歴史を書く」という営みそのものを私たちに与えました。

実際、私たちが古代の多くの文明について知っていることのかなりの部分は、ギリシャ人の探検家や歴史家たちの記録によるものです。彼らは自分たちの社会だけを記録したのではなく、外国へ赴き、異なる民族や文化の歴史も観察し、書き残しました。

多くの文明が自らの内側に目を向けていた時代に、ギリシャ人は外の世界へ目を向けました。未知の土地を見たい、新しいものを知りたいという興奮と栄光を追い求めたのです。

この精神こそが、後の西洋世界に他の文明にはできないものを生み出させ、築き上げさせる原動力となりました。安定した生活の維持を最高の目的とした多くの文明とは異なり、西洋は未知への挑戦を重視したのです。

しかし、私たちがギリシャから受け継いだのは探検への情熱だけではありません。

それは、「未知のものでも人間は理解できる」という確信です。

世界は観察できる。測ることができる。地図に描くことができる。そして理解することができる。宇宙には理性的な秩序が存在し、一定の法則に支配されている。そして人間はその法則を発見し、理解できる。

こうした考え方こそ、西洋的な精神の土台となりました。

数学、科学、医学はそこから生まれました。哲学や倫理学、さらには宗教思想もその上に築かれました。

そして、この知的土壌があったからこそ、キリスト教はヨーロッパに根づき、大きく発展することができました。アウグスティヌスやトマス・アクィナスに代表されるキリスト教神学や自然法思想も、その上に築かれたのです。

こうして生まれた文明は、単に共通の文化を持つだけの文明ではありませんでした。

それは、人間とは何か、人間が宇宙の中でどのような存在なのかについて共通の理解を持つ文明でした。

そこでは、人間には従うべき道徳があり、真理があり、善があり、美があると考えられました。人生には目指すべき理想があり、人はその理想に向かって努力すべきだと考えられたのです。

グローバル化で衰退した力を取り戻し、世界を指導

古代ギリシャ人にとって、「卓越すること」は人生そのものの目的でした。

彼らは都市生活のあらゆる場面を競争によって成り立たせていました。哲学、文学、彫刻、演劇、スポーツ、芸術、戦争、政治。どの分野でも人々は競い合い、自らの能力を高めようとしました。

古代ギリシャの都市は、優れた人々が自分の力を試し、証明するための舞台でした。人々は絶え間ない競争の中で自分を鍛え、より強く、より優れた、より美しい存在になろうと努力しました。理想に少しでも近づこうとしたのです。

もちろん、現代人にはこうした生き方は奇妙に聞こえるかもしれません。冷酷にさえ感じられるでしょう。

しかし現代社会では逆に、「誰も傷つかず、誰も失敗しない完全に安全な世界」が理想とされるようになっています。そこには勝利の栄光もなければ、敗北の悔しさもありません。

私たちは今、高みを目指して制度を作るのではなく、最低水準に合わせて制度を作っています。最も優れた人の可能性を伸ばすことよりも、最も弱い人が不快にならないことを優先しています。その結果、卓越した才能までが、平均的で平凡な基準の中に閉じ込められてしまっています。

しかしパルテノン神殿を築いた人々は違いました。

彼らは、人間の最も高い目標は他者を超えること、そしてあらゆる分野で最高を目指すことだと考えていました。

古代ギリシャの都市国家には激しい競争と対立がありました。しかし、その絶え間ない競争の中から、芸術、哲学、政治思想、知的活動の大発展が生まれました。そして地中海の一地方だったギリシャは、世界で最も偉大な文明の発祥地となったのです。

古代ギリシャ人は、この原動力を「テュモス」と呼びました。

それは情熱、強さ、勇気、誇りの炎です。

そして、この精神を失ったとき何が起こるのでしょうか。

国家は戦う意志を失い、向上する意志を失い、生き残る意志さえ失ってしまうのです。

今日の西側諸国は、この大切な資質を忘れてしまいました。

私たちは、自分たちを特別な存在にしたものを恥ずかしく思うようになりました。自分たちの成功や成果が他国より優れていることに後ろめたさを感じるようになったのです。

繁栄は誇りではなく、罪悪感の源になってしまいました。

私たちは、自分たちの偉大さが努力によって勝ち取られたものであり、それに値するものであるという確信を失ってしまったのです。

「ナショナリズム」という言葉も、いつしか悪い言葉として扱われるようになりました。

その結果、私たちは歴史的な記念碑を取り壊し、自国の歴史を否定し、子どもたちに自分の国を誇るのではなく恥じることを教えるようになりました。

さらに国境を開放し、産業を海外へ移し、防衛力の維持を怠るようになりました。

そして主権に関する重要な決定まで、自分たちの手の届かない国際機関や官僚組織へ委ねるようになったのです。

しかし、西側が弱くなってできた空白を埋めようとする国々は大勢いました。

西側の自信が揺らぐ一方で、そのライバルや敵対国はますます力を強め、富と軍事力を蓄積していきました。

そして今、私たちは歴史的な分岐点に立っています。

これからの 10 年にどのような決断を下すかが、次の 100 年の歴史を決めることになるからです。

私たちの選択次第で、西側がこれからも世界の先頭に立ち続けるのか、それとも衰退し、他者に従属する未来を受け入れるのかが決まります。

今行動するのか、それとも将来は行動する力そのものを失うのか。

その選択の時が来ているのです。

西側諸国が結束して主導権を維持しよう

トランプ大統領の下で、アメリカは自らの進むべき道を選びました。

私たちは、国家の力をためらうことなく強化することを選びます。重要なサプライチェーンを自国の管理下に取り戻し、製造業を復活させ、防衛力を再建し、未来の技術や産業で主導権を握るために競争していきます。

また、私たちは新たなフロンティアにも挑戦します。先端製造業や人工超知能、ドローン、兵器技術、サイバー空間、半導体、重要鉱物資源など、未来を左右するあらゆる分野で先頭に立つことを目指します。エネルギー生産を拡大し、工場を再建し、人類を再び月へ送り込み、宇宙開発の新時代を切り開こうとしています。

しかし古代ギリシャ人は、高い理想を持ちながらも決して現実離れした理想主義者ではありませんでした。彼らは国家には固有の利益があることを理解していました。また、外交や慎重な判断が重要であることも理解していました。

しかし同時に、外交がうまくいかないときには、必要に応じて武力を行使する力が欠かせないことも知っていました。さらに、力とは単に軍隊を持つことで

はありません。必要な時には本当にその力を使う意思があると相手に信じさせることも重要なのです。

これこそが、トランプ政権が取り戻そうとしている古典的な政治観と国家運営の考え方です。しかもそれはアメリカだけのためではありません。西洋文明全体が取り戻すべき考え方だと私たちは信じています。

私たちは、ヨーロッパも長い眠りから目覚め、かつてこのギリシャの地で燃え上がった精神を再び取り戻せると信じています。

その兆候はすでに現れています。ヨーロッパ各国では防衛費が急増し、新たな軍事協力や産業政策が相次ぎ、製造業の拡大も進んでいます。昨年ハーグで決定された歴史的な防衛強化方針が現実のものとなりつつあります。

その中心にいるのがギリシャです。ギリシャはエネルギー、移民対策、防衛など幅広い分野で欧州とアメリカの信頼できる同盟国として模範を示してきました。私たちは欧州全体がギリシャの後に続くことを望んでいます。

もちろん、時にはアメリカと欧州の間に意見の違いが生じることもあります。しかし、その違いによって同盟関係を壊してはなりません。私たちは力を合わせて、現代の脅威に対抗できる同盟を強化しなければなりません。

そしてそれは可能です。私たちは大西洋同盟を、「どちらかが得をすればどちらかが損をする関係」とは考えていません。むしろ、協力することで各国の力を足し合わせた以上の成果を生み出せる関係だと考えています。

その実例として、先月アメリカ、デンマーク、グリーンランドの間で結ばれた新たな合意が挙げられます。この合意によって北極圏の安全保障が強化され、NATO 全体の安全も向上します。

「私たちは共に勝利したい。いや、共に勝利しなければならない。」

愛国と自己犠牲は文明の美徳

最近では、自国民よりも国際社会全体の利益を優先することが「進歩的で賢明な外交」だと考えられることが多くなっています。

しかし、この点でも私たちは古代ギリシャ人から学ぶべきことがあります。

彼らは、自国に忠誠を尽くすことや、自国の利益を守るために行動することは決して利己的でも間違ったことでもないと考えていました。

彼らは「偉大な人物」という理想を強く信じていました。つまり、自らの行動によって永遠の名声を獲得する卓越した個人です。

しかし同時に、その栄光や名声は、自分自身のためではなく、自分よりも大きな何かのために努力し、犠牲を払い、大きな成果を成し遂げることで得られるものだと考えていました。

古代ギリシャの英雄とは、自らが忠誠を誓う価値ある大義のためなら、どんな代償も払う覚悟を持つ人間だったのです。

その例としてソクラテスがいます。彼は真理の探究をやめるくらいなら死を選びました。

また、ペルシャの大軍に包囲されながら最後まで戦ったテルモピュライの 300 人のスパルタ兵にもそれが見られます。彼らは自分だけ助かる道を拒み、任務と責任を放棄するより全滅を選びました。

さらに英雄アキレウスも同じです。彼は平穏で長い人生を送る機会を与えられながら、それを捨て、永遠の名誉を求めてトロイアの戦場に残ることを選びました。

こうした価値観こそが、西洋の道徳観や英雄観を形作ってきました。

信仰を捨てることを拒んだキリスト教の殉教者たち、祖国のために命を捧げた愛国者たちも同じ伝統の中にあります。

イギリスのトマス・モアからアメリカ独立戦争の英雄たちまで、その精神は受け継がれています。アメリカ独立宣言の有名な結びの言葉、「われわれは互いに、生命、財産、そして神聖なる名誉を誓う」にも、その考え方が表れています。

西洋はギリシャから「義務感」を受け継いだのです。それは、自分の信念、大義、祖国への揺るぎない忠誠心です。西洋の英雄とは、義務を果たすことが最も困難で苦しい状況においても、それを投げ出さない人々です。

約束を守り抜く人。持ち場を離れない兵士。そして、船と運命を共にする船長。そうした人々こそが称賛されるのです。

しかしこれは、例えばイランの急進的な宗教指導者たちが広めている考え方とは全く異なります。彼らは自爆攻撃を行う子供たちを英雄として称え、死そのものを目的として賛美します。

しかし西洋の伝統において英雄とは、死を崇拝する者ではありません。祖国や信念、義務といった、自分よりも大きな価値のために生き、必要なら命を賭ける者なのです。

文明を守るたたかい

西洋の英雄たちは、自分の信じる大義のために命を捧げる覚悟を持っています。しかし、彼らは死そのものを崇拝しているわけではありません。むしろ私たちは命を大切に考えるからこそ、その命さえ犠牲にして信念を守ろうとする人々を英雄だと認識するのです。

英雄、名誉、義務という考え方は、私たち西洋人にとってあまりにも当たり前になっています。しかし、それらは人類共通の普遍的な価値ではありません。それらは、このギリシャの地で生まれた独特の精神の産物であり、その後の西洋文明全体を形作ったものです。

そして今、私たちは祖先たちと同じ情熱をもって、その文明を守らなければなりません。パルテノン神殿を築いた人々の精神は、後にヨーロッパのキリスト教文明を築いた人々へと受け継がれました。ミラノやケルン、フィレンツェの大聖堂を設計した人々もまた、その伝統の継承者でした。

古代ギリシャの彫刻家たちが追い求めた「理想の人間像」は、後にミケランジェロの芸術の中で新しい形を取りました。また、宇宙や自然の仕組みを理解しようとしたギリシャ哲学者たちの探究心は、コペルニクス、ガリレオ、ケプラー、そしてニュートンへと引き継がれていきました。

新しい知識を求める情熱は、マゼランの世界一周航海を生み、コロンブスのアメリカ大陸到達につながり、さらにはアポロ 11 号の月面着陸にまでつながったのです。そしてアレクサンドロス大王を世界征服へと駆り立てた精神は、後にカエサルやシャルルマーニュ、エルナン・コルテスにも受け継がれ masita.

アメリカでも同じ伝統が新たな形でよみがえりました。広大な未開の土地は、西洋文明の想像力と野心を再び花開かせる舞台となりました。古代ギリシャ人が抱いた「新たな地平線を目指したい」という願望は、アメリカのフロンティア精神として受け継がれたのです。

アテネとローマの文明は、大西洋岸の小さな共和国だったアメリカを、大陸全体に広がる大国へと成長させました。歴代の偉大なアメリカ人たちは皆、共通した精神的な系譜を持っているのです。

その起源はアテネにあり、ローマによって形づくられ、キリスト教文明によって洗礼を受け、中世ヨーロッパの試練によって鍛えられ、イギリスの自由の伝統を受け継ぎ、そして大西洋を渡って新世界で再生しました。だから今こそ、私たちはその精神を再発見しなければなりません。

私たちは歴史の大きな転換点に立っています。それはアメリカだけの転換点ではありません。西洋文明そのものの運命を左右する転換点なのです。

軍事力と同盟の強化を

私たちが今日直面している脅威は、古代ギリシャの時代に人々が直面した脅威に劣らず、現実的なものです。国際機関ができたからといって、国家の利益が消えたわけではありません。私たちが平和を望んだからといって、戦争そのものがなくなったわけでもありません。

世界の国々は依然として軍備を増強し、影響力の拡大を目指し、領土、技術、資源、市場、エネルギー、そして権力をめぐって競争し続けています。

そして今、再び戦争の時代が訪れています。大国間競争も再び激しくなっています。脆弱性、侵略、テロリズム、さらには新しい形の脅威や攻撃も次々と現れています。だからこそ私たちは、こうした脅威に共に立ち向かうため、国際機関や同盟関係を強化しなければなりません。

しかし、その目的は加盟国の主権をなくすことではありません。むしろ加盟国の主権を守ることにあります。また、各国はそれぞれの歴史や文化、国民的な特徴を失わなくても、共通の利益のために協力することができるのです。

私たちはその実例を、ここギリシャとの関係の中で築いてきました。防衛協力、エネルギー、先端技術、そして大量移民という課題から欧州の国境を守る取り組みにおいて、アメリカとギリシャは緊密に協力しています。

私たちの友情は、アメリカ建国直後までさかのぼります。1821 年、ギリシャがオスマン帝国の支配から独立するために立ち上がったとき、多くのアメリカ人はその戦いの中に自らの独立戦争と共通するものを見ました。

そして 3 年後、著名なアメリカの政治家ダニエル・ウェブスターは連邦議会で有名な演説を行い、若いアメリカ共和国の代表たちにギリシャ独立運動への支持を訴えたのです。

西洋世界のすべての友人たちに

ウェブスターは演説の中で、まず人々に自分たちの身の回りを見渡すよう訴えました。彼はこう語っています。

「この自由な政治制度、この民衆による議会、この自由な討論と公開された議論の文化、知性と知性が競い合う伝統、さらには私たちが今集まっているこの建物の均整の取れた柱や美しい建築様式に至るまで、そのすべてがギリシャの存在を思い起こさせる。そして私たちは、他の人類と同様に、ギリシャに対して大きな恩義を負っているのである。」

この言葉は、語られた当時と同じように、今日でも真実です。私たちアメリカ人だけでなく、ヨーロッパの人々、そして西洋世界のすべての友人たちは、祖先たちがこの地とその歴史から学んだ教訓を、もう一度学び直さなければなりません。

ギリシャの歴史は、民主政治や哲学が生まれた原始的な姿を見せてくれるだけではありません。それは私たち自身の姿を映し出す鏡でもあります。この歴史は、私たちが偉大な英雄たちの遺産を受け継いでいることを教えてくれます。

そして、自分たちの出自を誇るべきだということも教えてくれます。いや、単に誇るだけではありません。強い誇りを持つべきなのです。私たちは、祖先たちがこの土地から築き上げた文明の偉業に驚嘆すべきです。

私たちの文明の歴史は、人類がこれまでに生み出した最も偉大な物語です。そしてその物語は、この場所から始まりました。ここで暮らした最初の西洋人たちから始まったのです。私たちは彼らから再び学ぶことができます。

勇気を。美徳を。強さを。そして、現代の私たちが直面する危険や試練に立ち向かう力を。

ありがとうございました。

【翻訳チェック　田中靖宏】